

関門海峡の生きた歴史

門司とその周辺地域は、1900 年代初め数十年間の貿易主導で急速な発展を遂げた時代を経た。その間、西洋からさまざまな建築技術や材料が取り入れられ、民間建築物や公共建築物の両方に適用された。その時代から残る建造物は、日本の国家文化遺産の一部とみなされている。そのような歴史的建造物の多くは博物館や公有スペースに転用されているが、地域社会のニーズに対応するため改修されたものもある。

旧宮崎商館

20 世紀初頭の下関は、石炭を燃料とする蒸気船の重要な補給基地であった。三菱やサミュエル・サミュエル商会など、国内外の石炭商社がここに支社を開設した。旧宮崎貿易ビルは、石炭商の宮崎儀一(1854 年生まれ)が神戸から下関に拠点を移した後、1907 年に本社社屋として建てたものである。煉瓦造り、アーチのあるベランダ、デンティルのコーニスなど、旧英国領事館のものとよく似ているが、おそらくこの建物は、イギリスの貿易会社ジャーディン・マセソン商会の下関支社（現在は破壊されている）をモデルにしたものと思われる。第二次世界大戦（1939-1945）後は、保険代理店、ヘアサロンが入り、現在は診療所が入っている。

日本郵船門司港ビル（旧門司郵船ビル）

門司港駅から通りを挟んで向かいにある門司郵船ビルは、1927 年に日本郵船会社の事務所として建てられた鉄筋コンクリート造の建物である。この海運会社は門司から郵便物を運ぶ蒸気船を運航しており、門司が貿易港として賑わうようになる以前から営業していた。その後、港や駅の双方へのアクセスが容易な立地にあるため、港の繁栄の恩恵を得ることが出来るようになった。建物の玄関はセラミックタイルで飾られ、九州で最も古いエレベーターのある小さなロビーへと続いている。現在もオフィスビルとして使用されているが、約 100 年前に日本郵船がビルを建てたこの駅前の一等地に惹かれ、様々な企業が入居している。

門司区役所

門司区役所もまた、この街で今なお活躍する歴史的建造物である。1930 年に建てられた鉄筋コンクリート 3 階建てのこの建物は、1963 年に北九州市と合併するまでは門司市庁舎であった。現代の基準からすれば特別に大きな建物ではないが、そのスケールの大きさから、1900 年代初頭の門司の繁栄ぶりを伺える。この建物は、建築家の倉田謙（1881-1940）が九州大学（旧九州帝国大学）の建築学部長であった期間に設計されたもので、彼のキャリアの中で既成の伝統的なデザインから独創的で自由な表現への転換が特徴づけられていた頃のものだ。区役所の比較的装飾の少ない外観と落ち着いた色調は、初期の国際

主義建築の特徴である。外壁はもともとタイル張りで、太陽の動きに合わせて色と影に変化を持たせるためのものだったが、その後タイルは張り替えられた。